

大高翔選【特選三句】

投入れの一政の薔薇脈打てり

春美

「投入れ」から「一政の薔薇」の佇まいがよく伝わる。いきいきとした魅力が「脈打てり」で存分に表現された。すつきりと一物で仕立た句。

油彩の香ほのと纏ひし冬館

光子

空間全体を詠んだ点に、独自性がある。「油彩の香」によって「冬館」に臨場感が宿った。「ほのと纏ひし」に作者自身の実感があり、絵と過ぐす豊かな時が感じられる。

文筥に思ひ閉じ込む冬の朝

玲子

絵のなかに入り「文筥」を手を取ったことで、「思ひ閉じ込む」という物語性ある表現が生まれた。「冬の朝」の静けさが余韻をもたらす。

山笑ふ一政の背に吾も立ち

和典

キャンバスに薔薇が弾けて一政展

雅

屏風絵の猿と目が合ふ初時雨

淳子

支那文筥に画伯の秘密冬暖し

千恵子

文筥の縁の群青小六月

恵

七十の薔薇際立ちて迫り来る

邦子

岩稜の画布をはみ出す夏の山

稔

冬薔薇削ぎ落とさるる筆の黒

敬子

反抗期の油彩の少女冬薔薇

年虹

一政の師は自然なり冬山河

久美子

春の雲来し方語る駒ヶ岳

和幸

六角形の椅子朝顔の展示室

敦子

冬銀河九十七年面壁す

朗

飛び出して届けてあげたい冬の朝

純一

捨て去って捨て去って咲く冬薔薇

翔